

本稿は、次世代における鉄道事業者の役割を「共創環境の構築」という視点から考察する。2026年に始動した新生「NANKAI」が推進するまちづくりを事例とし、都心部で醸成された熱量が沿線全体へと波及するメカニズムを通じ、歴史の連続性と社会実験が融合した新たな都市プラットフォームの雛形を示す。

はじめに

2026年4月、日本の純民間資本の鉄道会社として最も古い歴史を持つ南海電気鉄道は、南海電気鉄道株式会社と株式会社NANKAIに分社化して、新生「NANKAI」として始動した。これは単なる組織再編ではなく、鉄道インフラを中核としながら次世代のまちづくりを牽引するための布石である。本稿では、新生「NANKAI」が展開する「共創環境を通じたまちづくり」を事例に、都心の熱量がいかに沿線へ波及し、豊かな都市文化を育むのかを考察する。

第1章「グレーターなんば」への軌跡

南海電鉄の歴史は、1885（明治18）年の阪堺鉄道開業に遡る。以来、難波を起点として大阪の発展とともに歩んできた。その軌跡は単なる交通網

の形成にとどまらない。明治期における浜寺公園駅等の別荘地や行楽地開発をはじめ、沿線に住まいとエンターテインメント空間を創出し、新しいライフスタイルを提案してきた「沿線開発のパイオニア」としての歴史である。また、1932（昭和7）年には現代大阪の都市軸となる御堂筋や地下鉄の整備に先駆けて南海ビルを建設し、ターミナルシティ・なんばのまちづくりにいち早く着手した。

以降、大阪球場（現在のなんばパークス）やなんばCITYの開業などを通じて、エンターテインメントと商業空間を拡張し、街の魅力と熱量を高め続けてきた。なんばは、古くから大衆文化や商業が息づく混沌としたエネルギー（カオス）に満ちた街である。新生「NANKAI」は、この「なんば」という拠点を、単なる交通の結節点や商業の集積地として捉えるのではなく、文化開発のプラットフォームとして再定義しようとしている。

2023年に策定された「グレーターなんばビジョン（ENTAME-DIVER-CITY）」は、この歴史的文脈の上に立脚している。なんば駅周辺の「点」の開発にとどまらず、2023年に整備されたなんば広場を中心に周辺エリア（新世界、日本橋、道頓堀、新今宮など）を巻き込んだ「面」のネットワーク化へと向かう。明治期から続く沿線開発のDNAと、ターミナル開発で培った熱量が、今まさに

鉄道の未来学（基調報告）— 67

共創のプラットフォームとしての都市と鉄道：新生「NANKAI」が描く歴史の連続性と「グレーターなんば」構想

大阪公立大学 都市科学・防災研究センター 客員教授
大阪芸術大学 デザイン学科 客員教授

辻 邦浩

Kunihiro TSUJI

大阪府堺市生まれ。南海本線浜寺公園駅界隈で育つ。東京大学研究員、国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 特別客員教授、大阪公立大学 国際基幹教育機構 高度人材育成推進センター 特任教授を経て現職。現在は大阪公立大学 研究推進機構 協創研究センター イノベーション教育研究所客員教授を兼任。専門分野は都市デザイン、文化開発デザイン、文化人類学、サービスデザイン、コミュニケーションデザイン。Kunihiro Tsuji Design 代表としても、多様な企業と連携し大都市における市民一体型の共創社会を実現する都市デザインを実践している。kunihiro.tsuji@gmail.com

「グレーターなんば」という新たな都市空間へと拡張しようとしているのである。

新生「NANKAI」のまちづくりを紐解くうえで、この圧倒的な「歴史の重み」は決して切り離すことのできない重要な要素である。

なんば周辺エリアには、古くから多くの老舗が息づく商店街や演劇文化、前衛芸術を生み出してきたサロン文化など、時代を超えて蓄積された多様な文化レイヤーが地層のように重なっている。NANKAIのまちづくりは、こうした地域固有のDNAを単に「保存」するのではなく、現代的な価値へと共創的に「更新」しながら未来へつなぐことを起点としている。

一方で、激動する社会環境や多様化する価値観に対応するためには、過去からの延長線上だけではない、大胆なビジョンも不可欠である。2050年を見据えた未来都市の姿や、次世代の街の担い手や来街者がどのような環境を求めているのか。理想とする持続可能なコミュニティのあり方から逆算し、今なんばに必要な機能やプラットフォームを実装していく必要がある。

新生「NANKAI」が挑戦しているのは、この「フォーキャスト」と「バックキャスト」(※1)の高度な融合である。歴史という確固たるアイデンティティ(フォーキャスト)を土台に持ちながら、革新的な未来像(バックキャスト)へと向かう。この双方向

のアプローチを交差させることで、過去と断絶した無機質な再開発ではなく、「歴史の連続性」を持った有機的なまちづくりが可能となる。

第2章 歴史の連続性を紡ぐ…フォーキャストとバックキャストの交差点

本章では、フォーキャストとバックキャストの融合を都市形態学、文化人類学、デザイン論の視座から重層的に考察する。

1. 都市形態学の視座…インフラストラクチャーと都市組織の多層性

都市形態学(Urban Morphology)のアプローチにおいて、都市は単なる平面ではなく、過去から現在に至る物理的・空間的な介入が堆積した「地層(パリンプセスト)」として解読される。なんば周辺から新今宮に至るエリアは、旧来の水路や埋め立てられた川の痕跡といった歴史的トポグラフィ(地形・地勢)の上に、鉄道という近代インフラが敷設されることで形成された。特に、鉄軌道や高架下空間といった巨大な物理的構造物は、都市を分断する境界線であると同時に、独自のスケール感を持つ都市空間の余白(ヴォイド)を生み出してきた。

フォーキャスト的視点からは、この高架下や駅周辺の遺構が持つ空間的履

歴を読み解き、既存のコンテクストを次なる都市機能へと接続することが求められる。一方でバックキャスト的視点においては、2050年を見据えた未来の流動性から逆算し、これらの静的なインフラストラクチャーを、多様な主体の活動を誘発する「生きた空間」へと再編する戦略が不可欠となる。過去のインフラ遺産を「保存」するのではなく、未来の機能要件に合わせて「更新」し続けるダイナミズムこそが、歴史の連続性を担保する。

2. 文化人類学の視座…「キワ(境界)」と「ケ(日常)」のエネルギー

文化人類学的な視座からは、ミナミという街が持つ特有の「混沌(カオス)」と、そこから立ち上るエネルギーの源泉を紐解くことができる。大阪の都市文化は、整然と区画された中心部のみならず、水路の「汀(なぎさ)」や、街と街の「キワ(境界)」において最も活発に醸成されてきた。かつての難波周辺に存在した水脈の痕跡や、その周縁に形成された盛り場、さらには点在する神社などの結節点は、属性を超えた多様な人々が交錯する場であった。

従来のハレ(非日常)の空間創出に偏重した再開発とは異なり、NANKAIが射程に収めるべきは「ケ(日常)」の内部構造を多層化することである。フォーキャストを通じて、この「キワ」で発生してきたコミュニケーションの気配や、人間同士の澁みとエ

ネルギーの変換メカニズムを抽出する。そしてバックキャストによつて、未来の市民やクリエイターが自律的に交流し、新たなサブカルチャーや共創が生まれる「現代の汀」としてのプラットフォームを、都市の余白に再実装していくのである(※2)。

3. デザイン論の視座…トランジション・デザインと価値共創プラットフォーム

デザイン論、とりわけ複雑な社会課題に対して長期的な移行(トランジション)を設計するトランジション・デザインの観点において、まちづくりは物理的なハコモノの建設から「関係性のデザイン」へと移行している。NANKAIの分社化と新生に向けた動きは、鉄道事業者から「文化開発のプラットフォームビルダー」へのパラダイムシフトを意味する。

過去から現在までの沿線価値の蓄積を評価したうえで、未来の「あるべき都市の生態系(エコシステム)」から現在へと施策を逆算する。ここでは、地域企業、商店、クリエイター、さらには他エリアからの参画企業といった多様なステークホルダーが共に価値を創り上げる街全体が外に開かれた共同体のような共創の仕組みがデザインの対象となる。都市の記憶を共有しながら、新たな社会実験を許容する土壌をつくること。それこそが、未来のグレーターなんばを牽引する高度なデザ

※1：過去の歴史や文脈、既存の地域資源を基盤とし、現在から未来へと積み上げていく思考法を「フォーキャスト」(歴史からの積み上げ)という。一方、あるべき未来像の都市像を描き、そこから逆算して現在すべきアクションを決定するアプローチを「バックキャスト」(未来からの逆算)という。

※2：参考文献：松田法子研究室『汀の人文史』(<https://matsuda-lab.net/pages/migiwa.php>)

イン実践である。

このように、都市形態学が示す空間的基盤、文化人類学が紐解く人間の営みと熱量、そしてデザイン論が導く関係性の再構築という三つの視座を交差させることで（表1）、NANKAIのまちづくりは単なる「拠点の開発」から「歴史の連続性を紡ぐ文化の創出」へと昇華される。

第3章 「グレーターなんば」が示す 都心ネットワーク型のまちづくり

前章で論じた歴史の連続性（フォーキャストとバックキャストの交差）は、実際の都市空間においてどのような戦略として結実するのか。本章では、新生「NANKAI」が推進する「グレーターなんば」構想を、都市形態の地層学、カオス文化の包摂、産学連携の共創プロセス、そして広域交通インフラ再編という四つの次元から読み解く。

1. ゲニウス・ロキの再発見と水都の パリンプセスト（歴史的アプローチ）

都市には、その土地固有の霊性や記憶である「ゲニウス・ロキ（地霊）」が宿る。なんば周辺のトポグラフィを紐解くと、かつて「水都大阪」を形成していた重層的な地形や海岸線、そして上町台地からの伏流水や、難波新川、高津入堀川といった堀川の痕跡が

浮かび上がる。南海電鉄の歴史的インフラは、無機質な更地の上に構築されたのではなく、これらの水脈や埋め立てられた汀の記憶の上に敷設されている。NANKAIのまちづくりとは、地層の奥底に眠る水都の記憶を掘り起こし、現代の都市インフラの表層へと接続する試みである（※3）（表2）。

2. カオス文化の包摂：「プリコラー ジュ」（※4）による都市開発

現代の都市開発は、グローバル・スタンダードに準拠した均質化・標準化の罫に陥りがちである。スクラップ＆ビルドによるトップダウンのマスタープランは、清潔で合理的な空間を生む一方で、街から固有の文脈や陰影を奪ってしまう。これに対し、なんば・道頓堀・日本橋・新世界・新今宮エリアに息づくのは、伝統文化とサブカルチャーが路地裏の界限に入り乱れる本物のカオス（混沌）文化である。NANKAIが掲げる「グレーターなんば」構想から展開する共創プラットフォームとしての新プロジェクト「MADE in GREATER NAMBA」（※5）が進められようとしている。各エリア内で共創的に創造されるコトやモノに対して、エリア内のリーディングプロジェクトとしてピアーアルされていくプロジェクトである。そしてこれらの生きたコンテンツ群はネットワーク化されたアイコンとなり増殖していく。この試みは共創プラットフォーム

を表出させ、グレーターなんばのブランディングと帰属意識を醸成させ、混沌を排除するのではなく、既存要素を再顕在化し、新しい要素も加味して編み直すという新たな価値を創造するレヴィース・トロースの「プリコラージュ」の実践にほかならない。

3. 産学民連携 を通じた共創（Co- creation）のプロセ ス

このプリコラージュの実践において、不可欠なのが外部の「知」との接合である。NANKAI

Iは、大阪芸術大学や大阪公立大学等の大学研究機関や多様な企業、市民との産学民連携を通じて、先に紹介した共創プラットフォーム施策への社会実装アイコンのひとつとして「グレーターなんばヴィレッジングキャラバン」（※6）という「学び」のコンテンツが各エリアを越境しながら巡っていくキャラバンが計画されている。これは、物理的なハコモノを整備するのではなく、老舗などを歴史的ノード

表1 学術的視座に基づくフォーキャストとバックキャストの統合マトリクス

学術的視座	フォーキャスト（歴史的蓄積・文脈の抽出）	バックキャスト（未来像からの逆算・再定義）
都市形態学 (Urban Morphology)	歴史的トポグラフィ（旧水路、埋地）やインフラの痕跡を読み解き、空間の履歴と都市組織のレイヤーを評価する。	未来の都市動態から逆算し、高架下などの既存の物理的構造物を、新たな流動性を生む動的な空間へと再編する。
文化人類学 (Cultural Anthropology)	「汀」や「キワ（境界）」に生じる混沌としたエネルギー、および「ケ（日常）」における人々の営みと気配を抽出する。	多様な人々が越境し交錯する「現代のサロン・盛り場」を再定義し、未来の文化創出を誘発する人間関係を再実装する。
デザイン論 (Design Theory)	地域が持つ固有のアイデンティティや、これまでの企業活動が蓄積してきた無形資産（アフォーダンス）を言語化する。	持続可能な共創社会のビジョンを描き、産学官民が連携する「文化開発のプラットフォーム」をトランジション・デザインする。

表2 南海電鉄と水都大阪の空間的変遷（パリンプセスト構造）

時代区分	地形・水脈の記憶（基層のゲニウス・ロキ）	都市インフラの展開と再定義（表層のパリンプセスト）
江戸・明治期	上町台地西縁の伏流水、道頓堀・難波新川などの水路網。水運の要衝と「汀」に発生した多様な盛り場文化。	1885年、阪堺鉄道が開業し難波停車場が設置される。水運から陸運（鉄道）への一大パラダイムシフトの端緒。
昭和・平成期	都市化に伴う堀川の埋め立てと暗渠化。水都の記憶が地中に沈み、陸上交通と商業機能が極度に密集する。	ターミナルビルの巨大化、なんばパークス等の立体開発。高架下空間がミナミのディープな商いの受け皿となる。
現代・未来 (新生 NANKAI)	埋め立てられた「汀」の気配を、人と人が交錯・越境する現代の「界限」の繋ぎ目として精神的に復讐させる。	インフラを単なる「線」ではなく「面」の文化開発基盤（グレーターなんば）として再定義。街の余白をネットワーク化。

※3：これを一度文字を消して上書きした羊皮紙「パリンプセスト」になぞらえるならば、NANKAIのまちづくりとは、地層の奥底に眠る水都の記憶を掘り起こし、現代の都市インフラの表層へと接続する試みである。

※4：手元にある材料を組み合わせて作ること。

※5・6：「MADE in GREATER NAMBA」と「グレーターなんばヴィレッジングキャラバン」はともに筆者による構想段階のプロジェクトである。

4. なにわ筋線開業を見据えた戦略的マトリクス・ハブ化の機会とリスク

2031年春の開業が予定される「なにわ筋線」は、梅田（キタ）や新大阪エリアと直結し、関西国際空港へのアクセスを飛躍的に向上させる。これはなんばにとって広域ハブとしての地位を強固にする一方で、単なる乗り換えの「通過点」に転落するリスク（ストロー現象）をはらんでいる。なんばを単なる交通ハブから「次世代ターミナルの文化拠点化」へと昇華させるためには、産学連携のみならず、多様な企業との「産産連携」による新サービスの社会実装テストベッドとしての機能が不可欠である。さらに、沿線住民にとっての「なんば」を、買い物や通勤といった単一目的の街から、学び、交流し、創造する「多様な来街目的を持つ街」へと変容させる必要がある。

第4章 都心から沿線へ波及する共創環境の構築と未来への展望

1. 「グレーターなんば」を起点とする沿線価値の再定義と波及効果

第3章で論じたように、なにわ筋線の開通は、ストロー現象による都市の空洞化リスクという脅威を内包する一方で、なんばエリアを次世代ターミナルの文化拠点化へと昇華させる、鉄道事業者にとっての千載一遇の戦略的契機でもある。この広域ハブとしてのポテンシャルを都心部という「点」に留め置くのではなく、南海電鉄沿線全体という「線」および「面」へと力強く波及させることが、これからの広域的都市デザインにおける至上命題である。「グレーターなんば」構想の各試みによって生み出されたカオス文化の圧倒的な熱量は、沿線地域へと染み出すことで、画一的で無機質な郊外開発とは明確に一線を画す、固有かつ持続性のある「沿線文化」を再構築する強力な原動力となる。

2. 産産学民連携を基盤とする共創エコシステムの社会実装

都心から沿線への波及を具現化するための推進エンジンとなるのが、強固な共創エコシステムの構築である。産産学民連携を強固な基盤とし、NANKAI、多様な企業、そして大学（学生）が都市デザイン共創チームを形成

し、地域の歴史的文脈や未利用空間へと直接的に介入していく。これにより、インバウンドを含む多様な来街者に対して、単なる一過性の消費にとどまらない、より高度で文脈に根ざした「高次元体験プログラム」の提供が可能となる。このデザイン論的視座に基づくアプローチは、来街者自身をまちづくりのプレイヤーとして巻き込み、共に文化を創り上げるプロセスそのものを無形の資産（価値）へと昇華させる戦略である。

3. 鉄道事業における「文化と経済の好循環」のデザイン

こうした共創エコシステムによる文化の「創造的循環」は、鉄道事業者にとって不可欠な「経済の好循環」と両輪をなすものである。従来の人口増加を前提とした「ハコモノ開発と輸送人員の増加」という画一的な鉄道ビジネスモデルは限界を迎えている。これからの成熟社会において鉄道事業者に求められるのは、地域特有の「文化」を資本として育てることである。

例えば文化的な魅力と共創環境（コト・イミの創出）が整備されることで、世界や日本から高度な知的好奇心を持つ関係人口（イミ消費層）が継続的に流入する。彼らが地域に滞在し、学び、活動するプロセスが新たなビジネスやサービスを生み出し、沿線不動産の価値向上、ひいては多様なライフスタイルの定着（居住・就業）と

いう「強靱な経済価値」へと変換される。すなわち、NANKAIが文化開発のプラットフォームを提供し「土壤」を豊かにすることで、そこに芽吹く多様な経済活動から中長期的なリターンを得るという、次世代鉄道事業者ならではの持続可能な成長モデルである。このように好循環が発展的に持続するための文化と経済の接点がどのようにデザインされて経済循環を生み出していく方法論の解説は紙面の都合で別の機会へ譲ることにする。

4. カオスを包摂する文化エコシステムの拡張に向けて

「グレーターなんば」構想の真の目的は、なんばを中心とした各エリアのそれぞれの目的性を伴った相互送客を実現するネットワーク化にとどまらず、沿線という「線」、さらには広域な「グレーターミナミ」という「面」へと広がる、重層的な文化のエコシステムと経済の好循環を構築することにある。最後に、なにわ筋線開通を起爆剤とし、大阪特有の文化を戦略的に包摂しながら多様な主体が交わることで、なんばと沿線地域は世界に類を見ない「共創の舞台」へと進化を遂げる。歴史の連続性と未来の社会実験が高度に融合するこの実践は、単なる沿線開発の枠を超え、これからの成熟社会において鉄道事業者が牽引すべき「新たな都市プラットフォーム」の確固たる雛形となるであろう。